おとさだ
乙貞

第256号　通巻44第５号
令和６（2024）年12月１日発行

守山市立埋蔵文化財センター
〒524－0212　守山市服部町2250番地
TEL＆Fax　077（585）4397
Mail　maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

月日の経つのは早いもので、もう12月。日常生活が多様化し、かつて程ではないにしても、年の瀬の慌ただしい世情を表わす師走は言い得て妙ですが、他にも12月は年積月とも呼ばれます。この異称は、12月とは１年が終わり、リセットされるのではなく、新たに年を積み重ねる月という観念に基づいています。

正月には、家々に幸福をもたらすために祖霊が年神様となって恵方の山から降りてくる。人々は年神様を迎えるために、表玄関に門松を立てて目印とし、邪気を払うために注連縄を張ります。神棚に供える鏡餅は三種の神器のひとつ、八咫鏡に由来し、年神様への供物のほか、依代とする説があります。さらには、お節料理には年神様と人との共食儀礼のために両口箸を添えるとされています。

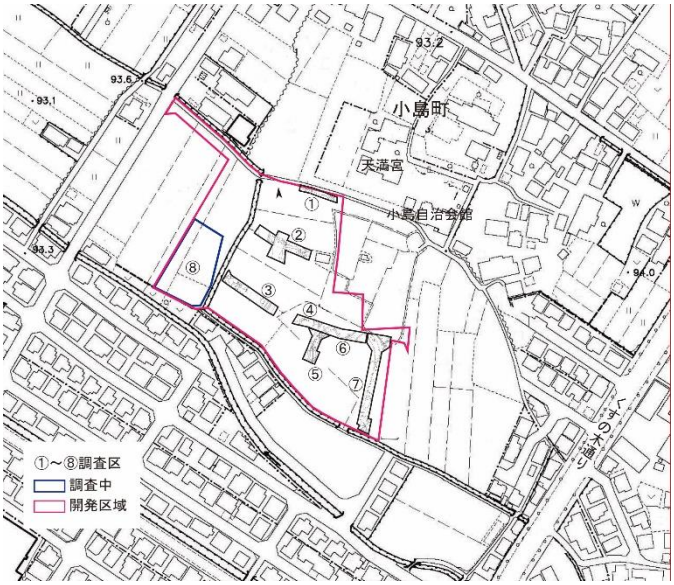
招かれた年神様は、家長をはじめとする家族に新たな一年と、その年を健勝に過ごすための霊力＝玉を授けるものと信じられてきました。一説では、年神様からの新たな年と玉を授かることが転じて、現在のお年玉になったとされています。

ひと月先にはなりますが、皆様方がご健勝にて新年を迎えられますことを年神様ともどもお祈りいたします。それでは、10月以降の発掘調査の成果とイベント情報をお伝えしていきます。

発掘調査だより

阿比留遺跡第６次調査

６月より着手した阿比留遺跡の発掘調査は現在、最終の調査区８の発掘作業に入っています。まず、これまでに埴輪など多彩な遺物が出土した古墳については、前回報告以降に行った調査区４～７の発掘作業によって、二重の周濠が巡っていることがわかりました。内周濠は幅5.5m～６m、深さ約40～70㎝で、外周濠は幅1.1m～３m、深さ20～75㎝の規模を測り、墳丘の全長は40mを超えていて、外周濠を含めると60m近い規模の古墳であることが推定できます。



調査地位置図

調査区毎の成果として、調査区６では、周濠から出土の大多数を占める円筒埴輪と須恵器や土師器が出土した他、周濠の幅５mにわたる箇所からこぶし大の石が多数見つかっていて、葺石であった可能性も考えられます。

調査区７では、内側の周濠の15mの範囲で、石見型木製品や笠形木製品を含む多数の木製品が見つかりました。

石見型木製品は、先頭部を墳丘側に向けた状態で見つかり、基部は調査区を跨いで、

調査区６に達していました。

笠形木製品の方は、直径約27～30cm、高さ約７cm余りの円形を呈し、貫通穴を穿っています。いずれも現在、樹種同定は行っていませんが、木目の観察からは針葉樹と推定できます。

以上が調査区６、７の成果の概略ですが、ここで、特筆すべき出土品として、埴輪や笠形木製品とともに出土した石見型木製品について報告します。

まず、石見型木製品は鰭状突起を特徴とする板状品で、近年は儀仗形木製品とも呼ばれています。５世紀になると、古墳の墳丘上には、人物、動物埴輪などの多彩な埴輪とともに、石見型木製品や笠形木製品などが樹立されていたことがわかっています。これらの木製品を木製立物、あるいは木製埴輪と呼んでいます。

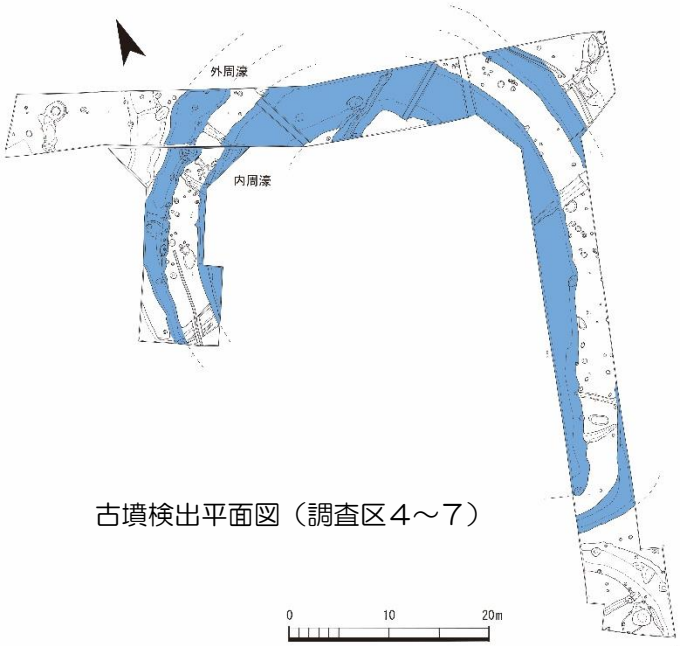
石見型木製品
（左：阿比留遺跡 中：服部遺跡　左：四条１号墳 ）

石見型木製品出土古墳・遺跡一覧表

奈良県		滋賀県	
1	御墓山古墳	11	服部19号墳
2	小墓古墳	12	野洲大塚山古墳
3	水晶塚古墳	13	林ノ腰古墳
4	唐古・鍵１号墳	14	阿比留遺跡
5	笹鉾山２号墳	**京都府**	
6	四条１号墳	15	保津車塚古墳
7	四条２号墳	**大阪府**	
8	勝山東古墳	16	峯ヶ塚古墳
9	小立古墳	**福岡県**	
10	つじの山古墳	17	釜塚古墳
18	韓国公州・月桂洞１号墳		

阿比留遺跡出土品は、5世紀末から6世紀初頭の時期が考えられています。大きさは現存長約2.6m、幅52㎝、厚さ2.5cmを測りますが、かろうじて石見型木製品と判別できるほどの状態で、コンディションはよくありません。

石見型木製品は、服部遺跡の古墳跡からの出土品を端緒例として、これまでに国内16例の出土にとどまっていて、阿比留遺跡出土品は、確認した限りでは17例目となります。その出土は近畿地方が圧倒的多数を占めていて、近畿地方でも奈良県に次いで野洲川流域での出土が多く、服部遺跡や阿比留遺跡の他に野洲市林ノ腰古墳、同市大塚山古墳で出土しています。また、近畿地方以外では福岡県糸島市釜塚古墳と日本海を越えた韓国公州の月桂洞古墳からの出土例が注目されています。



古墳検出平面図（調査区４～７）

調査は年内の終了を目指して作業に取り組んでいます。調査終了後には、まだ確定的でない古墳の墳形、あるいは古墳出土品目やそれぞれの出土数などを精査したうえで、今回の調査成果をまとめて報告します。　　（畑本）

『弥生の御朱印巡り』

に参加しました！

今秋より、名だたる弥生史跡35遺跡で連携する『弥生の御朱印巡り』に弥生史跡第30番として新規参入しました。なお、当館の他に、伊勢遺跡史跡公園と下之郷史跡公園も史跡第28、29番として同時に登録しました。

「発掘調査からみた古墳時代の情景」をテーマに開催しています秋季特別展の会期（12月15日〔日〕まで）も残り僅かとなりましたが、御朱印集めかたがたのご来館をお待ちしています。

秋季講演会 開催しました

令和６年度秋季講演会を11月16日（土）に開催しました。

今回のテーマは「古墳時代の塩生産と消費、若狭と近江」で、講師は、原始古代から塩の一大生産地であった福井県若狭町のお生まれで、土器製塩の研究をライフワークの一つにされている入江文敏さん（関西大学講師）です。

そのような入江さんならではの視点からは、距離が近いにも関わらず、若狭の塩が消費地の近江に流通していたとは考えにくい。塩は戦略物資として、ヤマト王権がその生産と流通を管掌していたのではとの所見を、わかりやすくお話ししていただきました。

入江さん、ご講演ありがとうございました！

講演会風景

歴史入門講座第５講 開催しました

10月19日（土）に講座第５講を開催しました。

今回の講師は野洲市教育委員会文化財保護課の鈴木茂さんで、「後に、すえものと呼ばれた土器、須恵器」をテーマにお話ししていただきました。

5世紀の日本列島には、渡来人によって数々の先進文化がもたらされます。登り窯で焼き上げられた須恵器もその一つで、6世紀には、守山でも従来からの土師器に加え、陶器のような硬質の須恵器が併用されるようになります。

講演は、須恵器の研究史から始まり、須恵器導入当初の生産地であった大阪府陶邑古窯址群から地方の生産窯の一つであった鏡山古窯址群での生産によって当地域に須恵器が普及するようになる過程で起こった変化について、須恵器の研究者ならではの視座で、わかりやすくお話しいただきました。鈴木さん、ご講演ありがとうございました。

第５講開催風景

埋蔵文化財センター友の会だより～
第３回・第４回見学研修会を開催しました！

見学研修にはうってつけの10月に第3回、11月には第4回見学研修会を開催しました。まず、第3回見学研修会は10月18日（金）に開催。大津市堅田の近江八景「琵琶湖の落雁」で知られる浮御堂と「湖族の郷資料館」、国指定名勝の居初邸庭園を訪れました。

今回の研修会は、まさに灯台下暗し、琵琶湖で隔たるとは言え、近くの堅田が湖上交通の拠点として発展してきた深い歴史を学ぶことができた、実りの多い研修機会となりました。

第３回見学研修会風景

第４回見学研修会風景

11月８日（金）に開催した第４回見学研修会は大阪府に足を運び、近つ飛鳥博物館で開催されている「発掘された日本列島2024」の観覧後、堺市の国史跡黒姫山古墳とみはら歴史博物館を見学しました。みはら歴史博物館では、展示されている黒姫山古墳出土品を前に古墳の説明を受け、史跡整備されている古墳の見学で日程を終えました。

開催当日は申し分のない天候の下、巨大な前方後円墳に象徴される古墳時代の文化に触れることができました。今回の研修でお世話になった見学先の関係者の皆様にお礼申し上げます。

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』や Facebook からもご覧いただけます！

◀歴史のまち守山はコチラから
http://moriyama-bunkazai.org

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶
https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks

【後記】正月に新たな一年を授かる年神様信仰と吻合するように、明治までの日本では、生まれるやいなや一歳で、生まれ月に関係なく人は正月に皆一斉に加齢する数え年が正式な年齢のとなえ方でした。この数え年の文化は、East Asian age reckingと呼ばれていて、かつて漢字や元号を共有していた中国をはじめ朝鮮半島、日本、ベトナムといった東アジアにみられた伝統的な年齢の数え方です。数え年が採用された背景には、三年毎に閏月が巡ってくる太陰太陽暦が長らく使われていたことや年齢に関してはゼロの概念がなかったこと、何にもまして律令国家以降の戸籍管理が容易であったことが理由として挙げられます。その数え年も明治６年（1872）に世界標準であるグレゴリオ暦への改暦に伴い、法律によって満年齢による年齢表記に換わり、それまでの数え年は、人生の節目となる厄年や七五三、還暦などに残されています。

さて、現在開催中の特別展示の目玉の一つになっている馬形埴輪に象られた馬、殊に競走馬の年齢は現在、国際標記に則り、生まれ年は０歳で、次の１月１日に一歳を数え、満年齢でも数え年でもない、馬独自の年齢観をもっていますが、1990年代までは人と同じように生まれたら一歳、年が明けると年をとる数え年が使われていました。古墳時代に請われて渡来した日本列島では、人とともに戦う最も親愛な動物の地位占めていたことが埴輪の世界観からもうかがうことができます。しかし、馬齢を重ねる、あるいは犬馬の齢など、中国由来の慣用句では馬の年齢はネガティブで、謙る際に引用されています。仮にミスター エドのように馬が喋れたら、馬の耳に念仏とはいかないでしょう。（馬耳東風）